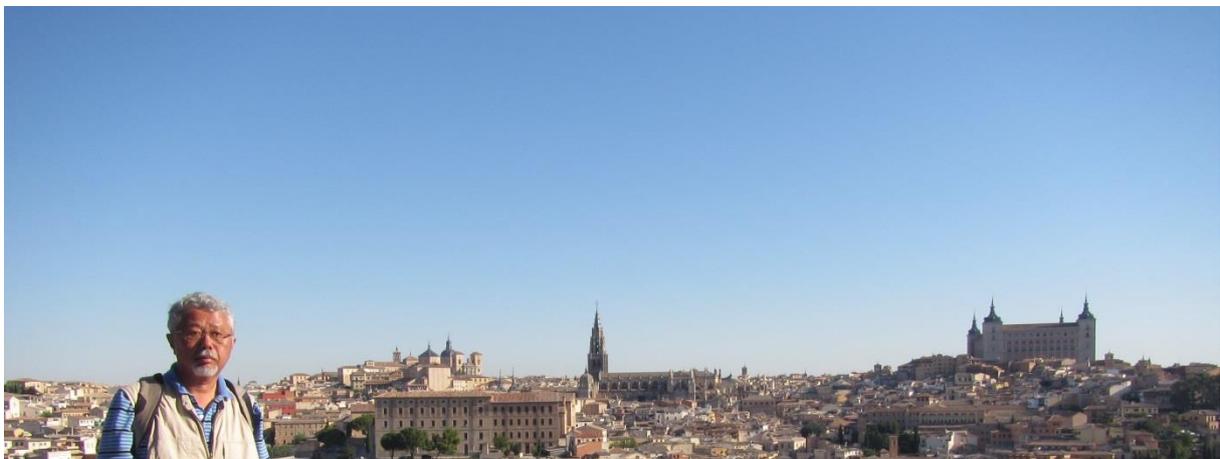


南蛮の風紀行-19 /スタルジック・トレドー1



伊東マンショたち天正遣欧使節は王都マドリッドに入る前、トレドに20日間滞在しています。彼らがヨーロッパに着いた時、フェリッペ2世はマドリッドを首都と定め、既に遷都もすんでいました。それまでフェリッペ2世の居城があったのがトレドです。いわば今のトレドは日本でいえば京都のような古都です。当時は首都が移り政治の中心都市は移ったものの、まだまだイベリア半島全体の経済・軍事の中心都市だったようです。

ところで、わたしたちはセルバンテスの「ドン・キホーテ」という小説の名前を知っています。その小説は正式には「*El ingenioso hidalgo Don Quijote de La Mancha*」つまり「才知あふれるラ・マンチャの郷土ドン・キホーテ」という長い名前が着いています。小説の内容を知っている人なら「才知あふれる」とはセルバンテスの皮肉であることにお気づきでしょう。その話はさておくとして、ドン・キホーテが「ラ・マンチャ」の人だということが分ります。そのラ・マンチャ地方が現在カスティーリャ＝ラ・マンチャ州であり、その州都がトレドです。



タホ川（ポルトガルではテージョ川）の湾曲が天然の要害になっています。ここトレド

の歴史は、またイベリア半島の攻防の歴史でもあります。正直言って、わたしは石の文明にそろそろ辟易していました。リスボンで「ジェロニモス修道院」、マドリッド郊外で「エル・エスコリアル修道院」に圧倒されたことももちろんですが、数百年の歴史をそのままに残している石の町並み、石畳、石造りの宮殿、お城、美術館に囲まれ続けてきたのです。はっと気が付くと、わたしがアマゾンのジャングルに感じる安らぎのようなものは感じることは出来ませんでした。



マドリッドからトレドまではスペイン国鉄 (RENFE) 自慢の新幹線のうち、近距離を走るアバントに乗ります。時速300キロだそうです、景観が広すぎてスピード感を感じません。

ところが面白いことにトレドでは、わたしは安らぎのようなものを感じたのです。この町は6世紀に西ゴート王国の首都に定められてから16世紀にフェリッペ2世がマドリッドに居を移すまでの千年間、ずっとイベリア半島の支配者の王都であり続けました。正しく京都に匹敵する古都なのです。その古都としての歴史がわたしに安らぎを与えてくれるのでしょうか。



トレド旧市街は城郭都市だったため、迷路のような細い石畳が特徴的です。

歴史と言えば8世紀初頭から400年間、この町はイスラム教徒の支配下に置かれ、12世紀にキリスト教徒側に奪還されましたが、それから15世紀末まではイスラム教徒もユダヤ教徒も平和共存していたのです。実は科学や工業の面ではイスラム教徒が、経済の面ではユダヤ教徒がたのです。

伊東マンショたちがトレドに来た時には、イスラム教徒もユダヤ教徒もいませんでした。

ジプシーと呼ばれていた人々はい

たようで、少年たちが当時のヨーロッパの貧富の差に、社会の明暗を感じたということが報告されています。

今回はイスラム文化については念頭にありませんでした。だからアルハンブラ宮殿などに行くつもりもなかったのです。それでもイベリア半島の、というより地中海全体でのイスラムの影響は今でも色濃く残っていることに、改めて驚かされることばかりでした。

確かに数字の概念、化学、冶金、教会などの大型ドーム建築のどれをとってもイスラム



石畳の迷路を曲がると不意にこんな景色にも出会います。子どもの頃の路地りでのかくれんぼのようで、なんだかウキウキしてきます。

圏で生まれ、磨かれたものといってもいいのではないのでしょうか。特に中世、ヨーロッパが停滞していた時にはほとんど、現代社会とは逆に、先進国はイスラム文化圏、途上国がヨーロッパだったといえるほどなのです。ポルトガルの海洋進出や、コロンブスの活躍などがなければ、そしてその後続くヨーロッパ諸国の植民地主義による富の篡奪がなければ、今日の世界はまた違うものになっていたでしょう。



話は変わりますが、左の写真はトレド旧市街の小さな公設市場の中にあった鮮魚店です。これまでも常に言ってきたことですが、魚屋さんで刺身にできる魚が手に入る国は日本とスペインだけです。内陸のトレドのこんな小さな魚屋さんでも、鮮度レベルは日本並でした。

最近の世界的な日本食ブームで、様子はだ

いぶん変わってきましたが、生で食べる習慣のなかった国々では、魚の鮮度についての生活感覚が違うのもしたかのないことでしょう。ですから、逆にスペインの魚屋さんのレベルの高いことが不思議でもあります、うれしいことでもありますね。